

琉球開闢神話にみる「天」の観念

呉 海寧

The Concept of "TEN" in Ryukyu Creation Myth

WU HAINING

This paper focuses on the creation myth of Ryukyu in "Chūzan seikan", "Chūzan seifu", and "Kyuyou", and investigates the concept of "TEN". The islands of Ryukyu were all created by a god who fell from heaven and obeyed the command of the emperor of "TEN". The first Kings of Ryukyu, were are believed to be descendants of the "Tenson". The concept was used to legitimize the absoluteness of the kings, while influencing the process of creation of official histories.

This paper demonstrates the concept of attaching great importance to "TEN" in the creation myth of Ryukyu.

開闢神話は一国の起源やその統治の正統性等を説くとき、とても重要な位置を占めている。世界各地域にさまざまな開闢神話が伝わっている。例えば、中国の盤古による天地開闢神話¹、日本のイザナギとイザナミによる島、国造り等の話がある。では、琉球はどのような開闢神話を持っているのか。それは歴史文献の中にどのように記述されているのかをみてみよう。また、その中にどのような「天」の観念が存在しているのか、それはいかにして登場しているのかを考察してみたい。

1『中山世鑑』にみる開闢神話

『中山世鑑』は1650年に向象賢によって編纂された史書である。琉球開闢から、尚清王代までの出来事を記載しており（尚真王代の記事欠如）、全5巻からなっている。その記述内容について、呉海燕は「王家の系譜、外交、政治、文化、経済の五つのジャンルにわたっている。中でも王家の系譜に属する記事

が全記事の半分以上を占め、『中山世鑑』全体の枠組みをなしている」²と指摘している。この指摘から、『中山世鑑』は王家の系譜である性格を持つこと、またその編纂意図は王家の系譜を整理する、ということが窺える。また、同指摘によれば、『中山世鑑』は仮名と漢字混じり文を使用しており、長文の漢文や和文訓読を引用する特徴があるという。このことから、『中山世鑑』は漢文化から多大な影響を受けていることが窺える。

『中山世鑑』は「この後に編纂される蔡鐸の『中山世譜』（1701年）や、これを改訂した蔡温の『中山世譜』（1725年）、『球陽』（1745年）等に決定的な影響を与える。」³と池宮正治は指摘している。

以下、琉球の開闢神話には、「天」の観念の在り方を究明したい。

事例① 『中山世鑑』巻一

琉球開闢之事

曩昔、天城ニ、阿摩美久ト云神、御坐シケリ。天帝是ヲ召レ、宣ケルハ、此下ニ、神ノ可レ住靈処有リ。去レドモ、未ダ島ト不レ成事コソ、クヤシケレ。爾降りテ、島ヲ可レ作トゾ、下知シ給ケル。(中略) 去程ニ、阿摩美久、天へ上リ、土石草木ヲ給ハレバ、嶋ヲ作クリ奉ントゾ、奏シケル。天帝、睿感有テ、土石草木ヲ給リテケレバ、阿摩美久、土石草木ヲ持下リ、嶋ノ数ヲバ作りテケリ。(中略) 次ニ首里森、眞玉森、次ニ嶋々國々ノ、嶽々森森ヲバ、作りテケリ。数萬歳ヲ經ヌレドモ、人モ無レバ、神ノ威モ、如何デカ可レ顯ナレバ、阿摩美久、又、天へ上リ、人種子ヲゾ、乞給ケル。天帝、宣ケルハ、爾ガ知タル如ク、天中ニ神多シト云ヘドモ、可レ下神無シ。サレバトテ、黙止スベキニ非ズトテ、天帝ノ御子、男女ヲゾ、下給。二人、陰陽和合ハ無レドモ、居處、並ガ故ニ、往來ノ風ヲ縁シテ、女神胎給、遂ニ三男二女ヲゾ、生給。長男ハ国ノ主ノ始也。是ヲ天孫氏ト号ス。二男ハ諸侯ノ始。三男ハ百姓ノ始。一女ハ君々ノ始。二女ハ祝々ノ始也。其ヨリシテゾ、夫婦婚合ノ儀ハ、アラハレケリ。守護ノ神モ現ジ給。キミマモントゾ、稱シ奉ル。キミマモント申スニ、陰陽ノ二神アリ。オボツカグラノ神ト申スハ、天神也。(中略) 阿摩美久、天へノボリ、五穀ノ種子ヲ乞下リ、麥粟菽黍ノ、數種ヲバ、初テ久高嶋ニゾ蒔給。(後略)⁴

『中山世鑑』における天孫氏についての記載は王府編纂文献の中で最も古い。記事によれば、天城に住む天帝が阿摩美久という神を遣わし、下界に島を造らせた。その後「天帝ノ御子」である男女一対の神が降ろされて、この二神によって三男二女が生まれた。その長男は国の主の始めとなり、天孫氏と称した。また、二男は諸侯、三男は百姓、長女は君々、二女は祝々の始めとなった、とされている。

この記事では、長男である天孫氏は「国ノ主ノ始」であることが強調され、琉球の初代国王の出自と琉球の開闢とが結びついていることがわかる。

上の琉球開闢神話の中には、「天帝」、「天城」「天神」等、「天」の要素がたびたび登場する。「爾降りテ、島ヲ可レ作トゾ、下知シ給ケル」の「降りテ」という記述から、島を創建した神は高所にある天上世界から降りてきたとされていることがわかる。さらに天帝や天神の居所として「天城」が想念されている。ここで、興味深いことは、中国では、天帝の居所を「天庭」「天宮」等の語で表す場合が多いが、琉球の開闢神話では天帝の居所を「天城」としている。これは琉球のグスク文化が背景となっていることが考えられる。

現在、「グスク」に「城」という漢字を当てるのが一般的である。例えば、首里城、中城城、今帰仁城、三重城等がある。糸数兼治の指摘によれば、「グスク」は「神の住居」であり、「御嶽の観念」とも重なりあうものであるという。⁵

御嶽は聖所として、古琉球の世界観の中で非常に重要な位置を占めている。開闢神話の記述では、「天帝」の命で島造りを始めた阿摩美久は、まず、最初に「嶽々森森」を創成した。その後、阿摩美久は「天へ上り、人種子ヲゾ、乞給ケル。」とあるように、御嶽等の創成が人類より優先していることがわかる。『中山世鑑』は御嶽が重要であることを示唆している。

「グスク」はかつて葬所であったことを主張する仲松弥秀は、その葬所の本体は聖域であり、「グスク」は「石垣で囲まれた神のいます、あるいは天降る聖所と、神を礼拝する拝所とを一つにした聖域」⁶であると主張している。つまり、「グスク」は聖なる区域として考えており、この点は御嶽と共通しているといえる。

「グスク」は「城」だけではなく、神聖な空間、すなわち聖域としても考えられている点が重要である。このような背景があるからこそ、最初の正史『中

山世鑑』に記述される琉球の開闢神話には、「天城」というような表現が用いられているのだろう。

以上みてきた、城（グスク）の帯びている性格からみれば、「天城」は天帝をはじめ、阿摩美久等の神々のおわすところ、聖域であることが容易に想像できる。「天城」は「アマグスク」と呼ぶ。糸数兼治は「琉球開闢之事」にみる「天城」について、「天城〔アマ（グ）スク〕とは天上界にあるとされる神々の御座処（おぼつかぐら）であるが、それをこの地上界に具現したのも『天城』と呼ばれる。したがってそれは天に近い高処（独立峯、又は丘陵台地舌端部）であること、土石草木はその構成要件をいったもので、それは土（土塁）や石（石垣）で囲まれていること、草木が生い茂っていることなどである。」⁷と指摘している。氏は、天上の聖所である「天城」は地上界の「グスク」の投影であると言っている。同時に、「天城」が持っている聖なる性格を強調している。

漢語の「天宮」、「天庭」、そして「天城」、いずれも天上世界の聖域として観念されている点に共通性がみられる。琉球の「グスク」文化という背景の下に「天城」という表現が生まれたと考えてもよいだろう。文化背景が異なる原因で、「天」の後ろの語は変化する特徴がみられる一方、「天」は不変であることは注目に値する。

琉球の開闢にまつわる伝承には、「天帝」、「天城」、「天神」等の「天」の要素が多く含まれていることが重要であろう。この中で一切の主宰者といえるのは「天帝」である。例えば、「天帝」は天神の阿摩美久を遣わして、下界に島々を造らせた。「天帝」はその子、「天帝ノ御子」、男女二人を下界に遣わした。その間に三男二女が生れ、人類はそれから繁昌していった。

「天帝」はすなわち「天」の帝という意味であり、天上世界の主宰者である。島造り、人種造り等の一連のことはすべて「天帝」の命で行われたことが、その超越的な性格を強調している。そこには「天帝」の万物の創造者としての性格が読み取れる。

では、『中山世鑑』の開闢神話に登場している「天帝」は中国の「天帝」と同質なものであろうか。『中山世鑑』と同時代に、すなわち17世紀に編纂された文献資料の中で、祭祀歌謡集『おもろさうし』（1531－1623年）と袋中の『琉球神道記』（1605年）も琉球の開闢神話について記している。この二つの文献

は『中山世鑑』より早く成立した。『琉球神道記』では、「天」より男女二人、「シネリキュ」と「アマミキュ」が降り、この二人が国土や人類を創成し、「天帝」の語は登場しない。『おもろさうし』では、琉球開闢のことについて、以下のように歌っている。

卷 10 - 512 一 むかし、はぢまりや、
てだこ、大ぬしや、
きよらや、てりよわれ
又 せのみ、はぢまりに
又 てだ、いちろくが
又 てだ、はちろくが
又 おさん、しちへ、みおれば
又 ぎよこ、しちへ、みおれば
又 あまみきよは、よせわちへ
又 しねりきよは、よせわちへ
又 しま つくれ、でゝ わちへ
又 くに つくれ、でゝ わちへ（後略）⁸

このオモロでは、「てだこ大ぬし」は太陽神のことを指しており、「てだいちろく」と「てだはちろく」という対的な表現も、太陽神の異称であると外間守善は指摘した⁹。池宮正治も「テダイチロク」・「テダハチロク」は日神であると述べている¹⁰。そして、太陽神、すなわち「てだ」が「あまみきよ」、「しねりきよ」をお召しになって、国土等を造成させたと中本正智は述べている¹¹。このオモロでは、超越的な性格をもち、一切を主宰する存在であるのは太陽神である。このような性格は『中山世鑑』の開闢神話にみる「天帝」の性格に等しいと推測できよう。このオモロについて、東恩納寛惇は「天の神を『てだこ』とあり、『てだ』は日輪のことであるから、日神の義である。それを世鑑が天帝に作った。」¹²と述べている。また、外間守善は「このおもろには、国つ神的性格をもつアマミキョ・シネリキョに対してすでに天つ神テダコ大主や、その異称テダ一郎子、テダ八郎子などが現われ、立体化された垂直構造の世界が成立している」¹³と指摘している。つまり、「天」の観念の存在を指摘している。

「天帝」は極めて中国的な表現であり、これは「天帝」が琉球固有なもので

はなく、外来のものである特性を物語っている。池宮正治は「おもろの日神（てだ）を天、天帝としたのはいかにも儒教的であり近世的であるが、一方では、天上から高貴な人だねを下ろす天、本土神話の高天原神話・天孫降臨神話と共通する。」¹⁴と指摘している。東恩納寛惇は「天帝子天孫氏などという造語は、世鑑の発案である」¹⁵と指摘している。前城直子は「天帝」「天城」「天孫氏」等の表現は「新造語」¹⁶であると述べている。中村哲は、『中山世鑑』の開闢神話は琉球固有なものではなく、オモロでは「天帝」が登場せず、日神すなわち太陽神の命令で島々が造られたのであると指摘している¹⁷。つまり、古くから伝えているオモロにみる「てだこ大ぬし」こそ、一切を超越する主宰者であり、『中山世鑑』等の後から創られた史書ではそれを「天帝」という表現にしたのである。

では、『中山世鑑』ではなぜ「天城」、「天帝」などの語を用いたのか。その理由について筆者は次のように考えている。第一は、編纂者が一定の漢文の素養を持っており、中国の「天帝」の意味をしっかりと理解した、という前提がある。第二は、中国の「天帝」が持っている超越的な性格は、オモロに謡われる「てだこ」、すなわち太陽神が持っている万物を主宰する性格と合致しているからである。

例えば、前城直子が指摘した「新造語」について、この言い方は少し不適切であると考えられる。なぜならば、中国では「天帝」という語がすでに存在していたからである。編纂者はその関連知識を有していた上で、「天帝」という語を用いたので、理由無しにその語を作り出したのではないであろう。

また、前城直子は、「従っておもろさうしにおける天界の主宰神は、『太陽神』『日神』ということになる。世鑑になると、天界思想を重視しているから必然的に天界における主宰神についての記述も明確であり、特に『天帝』という造語をあてていることによって、同思想を整備化しようとする意図が働いていた」¹⁸と述べている。前城氏は、「天界思想」を重視していると指摘したが、なぜ「天界思想」が重視されるのか、つまりその背景としての「天」の観念について触れていない。さらに、これらの先学は「天帝」等の語は後で造られたものであると指摘しているが、では、なぜ「天帝」という語を選んだのか。

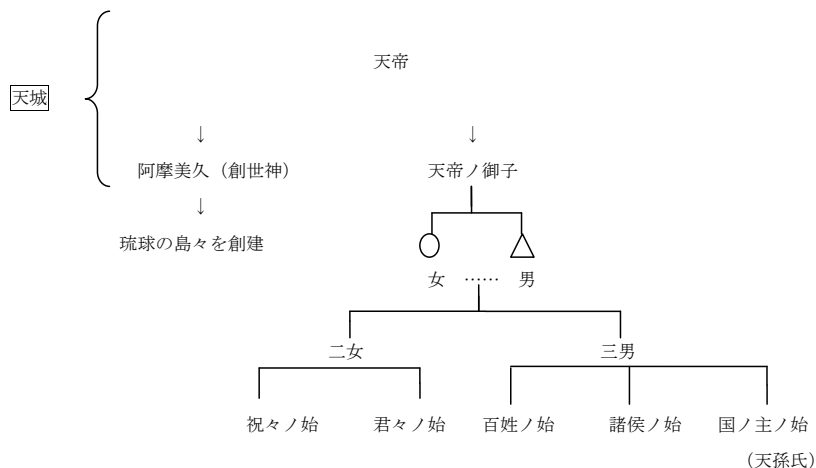
これらの問題について、私はそのあてられた語「天帝」にこそ意味があると

考えている。これらのことから、すくなくとも支配階層を代表する編纂者の意識の中には、「天」の観念が存在していることがいえる。そして、さきにもてきたように、『おもろさうし』にみる琉球語の表現「てだこ大ぬし」は、『中山世鑑』の中で漢語の表現「天帝」となっている。その理由は、開闢神話の世界では、「太陽神」と「天帝」は同じく造物主という意味であるからと指摘した。これは「天」の関連概念や用語等が正確に使いこなされ、首里王府が編纂した歴史書の中に一定の役割を果たしてきたことを証明しているといえるだろう。

琉球の開闢神話の中で初めて治世を行った人物・天孫氏が、天帝の後裔であることを強調し、彼より始まった王統の起源を神聖至高とされる「天」に求めている、と記している。これらのことから、王の起源と王権の正統性を強調するために、「天」の観念が重要な役割をしていたことは明らかであろう。

『中山世鑑』に記述されている開闢神話について、図で示すと以下のようになる。

【『中山世鑑』】



以上、『中山世鑑』における琉球の開闢神話に関する記述をみてきた。その後成立した歴史文献では、殆どそれを踏襲しているが、記述上にはいくつかの相違点もみられる。では、それらの文献に、琉球の開闢神話はどう記されているのか。以下、『中山世鑑』の開闢神話と比較しながら、蔡鐸本『中山世譜』、

蔡温本『中山世譜』に記述された開闢の事をみてみよう。

2 蔡鐸本『中山世譜』にみる開闢神話

『中山世譜』には、蔡鐸本『中山世譜』（以下蔡鐸本「世譜」と略記する）と蔡温本『中山世譜』（以下蔡温本「世譜」と略記する）がある。蔡鐸本「世譜」は1701年に、紫金大夫蔡鐸によって編纂され、『中山世鑑』を漢訳補訂したものである。その編纂の目的は、『中山世鑑』を漢文に重修することである。

蔡温本「世譜」は、1725年に蔡温によって蔡鐸本「世譜」を改修したものである。蔡温は蔡鐸の次子であり、沖縄の歴史上有名な政治家である。尚敬王の代に蔡温は国師に選ばれ、のち三司官にも任命された。また、蔡温は政治以外に、経済・儒学・風水学・哲学関係の著作も著し、学者としても高く評価されている。

まず、蔡鐸本「世譜」の編纂内容や性格を見てみる。蔡鐸本「世譜」の内容は「王家の系譜、外交、統治、造営、災異の五つのジャンルにわたり」、その全体の枠組みとして、「王家の系譜と、中国との朝貢関係を重視する『国策』が並行している」¹⁹と呉海燕が指摘している。氏のこの指摘から、蔡鐸本「世譜」は、①王家みずから系統（系図、出自）等を整理するために編纂された王家の系譜であり、②中国との朝貢関係を中心に編纂されていた文献、であることがわかる。

つまり、『中山世鑑』と比べると、王家の系譜を整理するという特性が両者は共通しているが、中国との朝貢関係を重視して編纂された点は、両者は異なっている。

また、『中山世鑑』に比べると、蔡鐸本「世譜」は『『中山世鑑』の記述に漂っている古琉球的『神国思想』を省き、比較的客観的な記述を目指している」²⁰と呉海燕が指摘している。つまり、蔡鐸本「世譜」は『中山世鑑』と同様に王家の系譜であるという特性はみられるが、記述上『中山世鑑』より客観的になっているのである。王家の系譜として蔡鐸本「世譜」は重要な位置を占めているといえる。

事例② 蔡鐸本『中山世譜』卷一

総論

夫未生之初名曰太極時乃混混沌沌無有陰陽清濁之辨既而自分兩儀清者升以為陽濁者降以為陰自是天地位定人物生矣其初一男一女化生于大荒之際男性健而懷女女性順而隨男月去日来自成夫婦之道人倫始矣及生三男二女一男為君王之始而謂天孫氏二男為按司之始三男為蒼生之始一女為君君之始二女為祝祝之始而五倫已備大道始矣時風俗淳樸民習端慤神因而見焉是焉為君真物（読み下し：それ未だ分れざるの初めを名づけて、太極と曰ふ。時乃ち混混沌沌として、陰陽清濁の辨有ること無し。既にして自ら兩儀に分かれ、清者は昇りて以て陽と為り、濁者は降りて以て陰と為る。是れより天地の位定まりて、人物生ず。其の初に、一男一女、大荒の際に化生す。男、性健にして、而して女を懷む。女、性順にして、而して男に隨ふ。月去り日來り、自ら夫婦之道を為す。人倫始まる。三男二女を生ず。一男は君王の始と為り、而して天孫氏と謂ふ。二男は按司の始と為り、三男は蒼生の始と為る。一女は君君の始と為り、二女は祝祝の始と為る。而して五倫已に備わり、大道始まる。時に風俗淳樸、民習端慤にして、神因りて見る。是れ君真物たり。）²¹

蔡鐸本「世譜」の開闢神話では、世界はまず「太極」という陰と陽、清と濁が分かれていない混沌の状態から始まると記している。その後、兩儀が分かれ、すなわち清なるものは上昇し陽となり、濁なるものは下降し陰となる。それから、天と地の位が定まり、人と物が生ずる。その時、「大荒之際」に一男一女が化生し、これより夫婦になり三男二女が生まれた。その一男は「君王之始」となり、「天孫氏」と謂う。二男は「按司之始」、三男は「蒼生之始」、一女は「君君之始」、二女は「祝祝之始」となった。これで、人類が繁栄し、五倫が始まったという。

事例①の『中山世鑑』の開闢神話と比べて、蔡鐸本「世譜」は陰陽未分、「太極」という混沌状態から開闢神話が始まっている。つまり、開闢神話が発生した背景なる環境等についても詳細に記している。これについての記述は『中山世鑑』においてはまったくみられない。『中山世鑑』と同様な部分は、三男二

女の生まれたことである。その一男は「君王之始」、『中山世鑑』では「国ノ主ノ始」、二男は「按司之始」、『中山世鑑』では「諸侯ノ始」、三男は「蒼生之始」、『中山世鑑』では「百姓ノ始」、一女は「君君之始」、『中山世鑑』では「君々ノ始」、二女は「祝祝之始」、『中山世鑑』では「祝々ノ始」となったと記述されている。「按司」は琉球独特な言い方であるので、これを『中山世鑑』は「諸侯」とし、非常に中国風の言い方となっている。このように、言葉を言い換えただけで、基本的には同じことを書いてある。

次に『中山世鑑』との相違点を見てみる。三男二女を生んだ人物に注目する。蔡鐸本「世譜」は「一男一女」となっており、『中山世鑑』は「天帝ノ御子」である「一男一女」と記している。同じく三男二女を生んだことから推理すれば、蔡鐸本「世譜」の「一男一女」は「天帝ノ御子」である可能性が大きい。しかし、蔡鐸本「世譜」には「天帝ノ御子」が登場しないため、「一男一女」は「天帝の御子」であるかどうか断定できない。蔡鐸本「世譜」の「一男一女」は「大荒之際」に「化生」と記している。

また、『中山世鑑』の開闢神話にみる、島々や国土の創成、その創成に関わる神についての記述は、蔡鐸本「世譜」にはみられない。例えば、天帝に命ぜられ下界に島々を造った阿摩美久にあたる神等について、蔡鐸本「世譜」はふれてない。『中山世鑑』にみる「天城」、「天帝」等の語も見られない。しかし、蔡鐸本「世譜」は「天地位定人物生矣」と記している。「天」と「地」が対置するという二元的な世界観の存在がうかがえる。

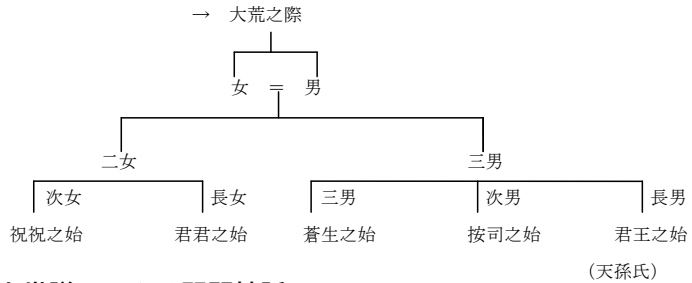
そして、蔡鐸本「世譜」に「天城」、「天帝」等の表現は見られないが、「天孫氏」という表現が継承されている。しかも、この「天孫氏」は、『中山世鑑』も、蔡鐸本「世譜」も、琉球の初代の国君であると記している。

蔡鐸本「世譜」に記述された開闢神話の登場人物の関係を図で示せば以下のようになる。

【蔡鐸『中山世譜』】

↑天(陽)

↓地(陰)



3 蔡温本『中山世譜』にみる開闢神話

続けて、蔡温本「世譜」に記述された開闢神話をみてみよう。蔡温本「世譜」は、1725年に首里王府で編纂された漢文文献である。その内容について、呉海燕氏は「王家の系譜、外交、統治、造営・整備、祥瑞・災異、文化と経済の七つのジャンルに」²² わたっていると指摘している。つまり、単に内容から言うと、蔡鐸本「世譜」の五つのジャンルに比べて、蔡温本「世譜」のほうはより豊富になっているのである。また、蔡温本「世譜」の性格について、呉海燕氏は「『王家の系譜』より、厳密な意味での『正史』の『本紀』に近づけたといえよう」²³ と述べている。「本紀」とは紀伝体の歴史で、帝王の事跡や国家の大事を叙述した部分を意味する。つまり、蔡温本「世譜」は王家の系譜である以上に、歴史書としての性格をより強くみせているといえよう。

蔡鐸本「世譜」の記述は『中山世鑑』より客観的になっていることを先でみた。蔡温本「世譜」の記述は蔡鐸本「世譜」よりさらに豊富となり、正史に近づくことができた。『中山世鑑』、蔡鐸本「世譜」、蔡温本「世譜」、三者は歴史書として編纂の過程で漸次成熟していった、といえるだろう。

事例③ 蔡温本『中山世譜』巻一

歴代総記

(前略) 蓋我国開闢之初。海浪氾濫。不_レ足_レ居處。時有一男一女。生_レ大荒際。男名_レ志仁禮久。女名_レ阿摩彌姑。運_レ土石。植_レ草木。用防_レ海浪。而嶽森始矣。嶽森既成。人物繁夥。然當時之俗。穴居野處。

與_レ物相友。無_レ有_二价傷之心_一。歷_レ年既久。人民機智。物始為_レ敵。於_レ時復有_下一人。首出。分_二群類_一。定_二民居_一者_上。叫称_二天帝子_一。天帝子。生_二三男二女_一。長男為_二天孫氏_一。国君始也。二男為_二按司始_一。(按司即如二中朝諸侯之類一) 三男為_二百姓始_一。長女為_二君君之始_一。(君君婦女。掌_二神職_一者之称也。君君者。令_二貴族婦人数十人。各掌_二神職_一。故合_二称之_一曰_二君君_一。康熙之初。議減_二其数_一。而今有_二数職_一存焉) 次女為_二祝祝之始_一。(祝者亦掌_二神職_一者之称也。祝祝者。諸郡諸村。各有_下婦女掌_二神職_一者_上。故合_二称之_一曰_二祝祝_一。至_レ今尚存) 而倫道始矣。²⁴

蔡温本「世譜」では、まず、開闢の当初、大荒の際に一男一女が生まれ、男は「志仁禮久」、女は「阿摩彌姑」と言うことを記している。その後、二人が土石を運び、樹木を植え、嶽森を中心に琉球の島々を創り上げたというのである。その時、「天帝子」という人物が登場する。「天帝子」が初めて「群類」をわかち、「民居」を定め、そしてこの天帝子により三男二女が生まれた。長男は天孫氏と言い、国君の始めとなり、二男は按司の始め、三男は百姓の始め、長女は君君の始め、二女は祝祝の始めとなった、というのである。

蔡鐸本「世譜」と同様に、蔡温本「世譜」も最初に「大荒」の際に「一男一女」が生まれたと記している。但し、蔡鐸本「世譜」の「一男一女」はその名が伝わっていないのに対して、蔡温本「世譜」では、男は「志仁禮久」、女は「阿摩彌姑」とその名を記している。後に、この二人が一連の国土創成を行ったのである。『中山世鑑』と同じように、蔡温本「世譜」も「嶽森」の創成から始まったと記している。

国土創成について、『中山世鑑』・蔡鐸本「世譜」と蔡温本「世譜」を比べると、まず、蔡温本「世譜」は琉球の島々の創建に関する記述が分量的にかなり増えていることが明らかである。さらにその内容も大分細かくなっていることがわかる。前項で述べたように、蔡鐸本「世譜」は国土等の創成、及び創成に関わる神については殆どふれていない。蔡温本「世譜」では、国土の創成神は「志仁禮久」と「阿摩彌姑」とし、二人が土石を運び、樹木を植え、嶽森を創成したこと等を細かく記述している。

そして、『中山世鑑』と蔡温本「世譜」との相違点について、もっとも注目されるのは「天帝子」の登場である。『中山世鑑』・蔡鐸本「世譜」のいずれに

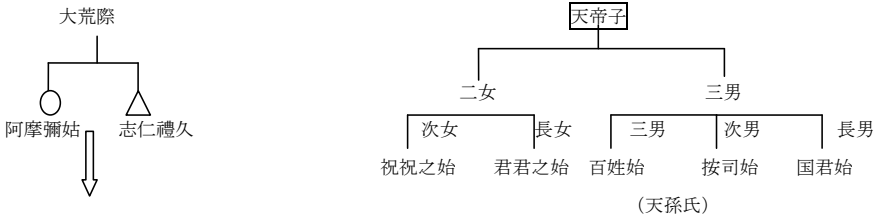
も、「天皇子」という語は見られない。それに、三男二女、すなわち「天孫氏」を生んだのは、『中山世鑑』では天帝の御子である「一男一女」、蔡鐸本「世譜」では大荒の際に化生した「一男一女」である。蔡温本「世譜」だけが「天皇子」によって生まれたと記している。結果からみれば、この「天皇子」は「一男一女」に等しい存在になる。

「天皇子」とは何か考えてみよう。まず「天帝ノ御子」を略記し「天皇子」になる可能性が考えられる。池宮正治は『中山世鑑』では「天帝の子（天皇子）が結婚して人を生み、アマミキュが国土を修造する」²⁵と述べている。この指摘をみれば、氏は蔡温本「世譜」にみる「天皇子」は『中山世鑑』にみる「天帝ノ御子」であると主張していることがわかる。しかし、「天皇子」の登場については、「於_レ時復有_下一人。首出。分_レ群類_一。定_レ民居_一者_上。叫称_レ天皇子_一。」となっており、つまり、「天皇子」は「一人」であり、「一男一女」ではない。だとすれば、三男二女を生んだのは「天皇子」一人であることになる。普通なら、一人で子を生むのはありえないことであるが、「神」であればそれは可能になる。それゆえ、蔡温本「世譜」にみるこの「天皇子」は「神」に等しい存在であると考えたほうが妥当ではなかろうか。このことについて若干の不明点が残っており、今後の課題にしたい。少なくとも「復有_下一人」とあるように、「一男一女」ではないことが明らである。

蔡温本「世譜」は『中山世鑑』の「天城」、「天帝」というような語は見られないが、「天皇子」等の「天」を含む語がみられる。それと、『中山世鑑』、蔡鐸本「世譜」と同じく、初代の国君は「天孫氏」であると記している。

蔡温本「世譜」に記述された開闢神話の登場人物の関係は、図で示せば以下のようなになる。

【蔡温『中山世譜』】



琉球の島々を創建

4『球陽』にみる開闢神話

最後に史書として編纂年代が一番新しい『球陽』を見てみよう。『球陽』は1745年に首里王府が編纂した歴史書の集大成であり、各領域・分野の情報を幅広く網羅した最も重要な資料である。『球陽』の文献性格等については、ここでは割愛する。

事例④『球陽』巻一國初

1(琉球分野及開闢)

(前略) 蓋し我が國開闢の初、海浪氾濫し、居處するに足らず。時に一男一女有り、大荒の際に生ず。男は志仁禮久と名づけ、女は阿摩彌姑と名づく。土石を運び、樹木を植ゑ、用ひて海浪を防ぎ、而して嶽森始まる。嶽森既に成りて人物繁顆す。(中略) 時に復一人の首めて出でて群類を分かち、民居を定むる者有り。叫びて天帝子と稱す。天帝子、三男二女を生む。長男は天孫氏と為る。國君の始なり。二男は按司の始と為る(按司は即ち中朝の諸侯の類の如し)三男は百姓の始と為る。長女は君君の始と為る(君は、婦女の神職を掌る者の稱なり。君君は、貴族の婦女數十人をして各神職を掌らしむ。故に之れを合稱し君君と曰ふ。康熙の初、議して其の數を減ず。而して今數職の存する有り)。次女は祝祝の始と為る(祝は亦神職を掌る者の稱なり。祝祝は、諸郡諸村、各婦女の神職を掌る者有り。故に之れを合稱して祝祝と曰ふ。今に至るも尚存す)。而して倫道始まる。²⁶

『球陽』のこの記事を見れば、開闢の事についての記述は蔡温本「世譜」に非常に似通っていることが分かる。開闢の当初、「太荒の際」にまず「一男一女」が生ずる。その男は志仁禮久、女は阿摩彌姑という名である。志仁禮久と阿摩彌姑は土石を運び、樹木を植え、嶽森を中心に島々を創り上げたという。そして年月を経て、また一人「天帝子」とよばれる人物が出てきて、「群類」を分ち、「民居」を定むというのである。この「天帝子」によって、三男二女が生まれ、長男は天孫氏となり、國君の始となり、二男は按司の始、三男は百姓の始、長女は君君の始、次女は祝祝の始となった。

『球陽』にみる国土の創成や天孫氏の誕生については、殆ど蔡温本「世譜」を踏襲している。両者の記述を細かく対照すると、相違点は次の一点があるだけである。それは、蔡温本「世譜」の「植_草木_」が『球陽』に「樹木を植ふ」となっていることである。『球陽』においても、「天孫氏」は「天帝子」によって生まれ、またこの「天帝子」は先に論じてきたように、『中山世鑑』と蔡鐸本「世譜」にみない表現である。要するに、「天帝子」は蔡温本「世譜」と『球陽』だけに登場する。『球陽』には「天城」、「天帝」等の表現はみられないが、「天帝子」と「天孫氏」等の「天」を含む語がみられる。

以上考察してきた開闢神話に関する記述は一見類似しているが、実にそれぞれ異なっていることが確認できた。例えば、「大荒」の際に化生したのは誰であるか。「天孫氏」は一体誰によって生まれたのか。誰によって国土を創成したのか、国土創成の神と「天孫氏」は直接関係しているのか。以下、これらの明らかにされてきたことを整理してまとめたい。

まず、各文献に記述されている開闢神話に基づいて作成した表をみてみよう。

文献名 登場関係	『中山世鑑』	蔡鐸『中山世譜』	蔡温『中山世譜』	『球陽』
大荒の際に化生	なし	一男一女	一男一女 (志仁禮久、阿摩彌姑)	一男一女 (志仁禮久、阿摩彌姑)
国土創成の神	天神阿摩美久	なし	一男一女 (志仁禮久、阿摩彌姑)	一男一女 (志仁禮久、阿摩彌姑)
天孫氏を生む	天帝ノ御子 (一男一女)	一男一女	天帝子	天帝子

表を見ながら議論していく。縦の列は、開闢神話における主な出来事を時間

順に示したものである。横の列は、考察の対象となった文献である。まず、「大荒」の際に化生したのは誰なのか。この部分について、「大荒」という表現は『中山世鑑』にみられないので、表には「なし」となっている。そして、他の三つの文献にはすべて「大荒」という表現がみられる。順次みていくと、「大荒」の際に化生したのは、蔡鐸本「世譜」では「一男一女」である。蔡温本「世譜」では「一男一女」、男は「志仁禮久」、女は「阿摩彌姑」という名である。『球陽』では「一男一女」、同じく男は「志仁禮久」、女は「阿摩彌姑」となっている。つまり、「大荒」の際に化生したのは「一男一女」である点は、蔡鐸本「世譜」、蔡温本「世譜」、『球陽』で共通している。ただ、蔡鐸本「世譜」は「一男一女」の名について全く触れていないので、完全に一致しているのは蔡温本「世譜」と『球陽』である。

次に、国土創成の神と「天孫氏」は直接関係しているのか。まず、国土の創成について、『中山世鑑』では、天神の阿摩美久によって創成されたという。蔡鐸本「世譜」には関連記載は全く見られない。蔡温本「世譜」と『球陽』では、「一男一女」、すなわち「志仁禮久」と「阿摩彌姑」によって創成されたと記している。つまり、国土創成の神は、『中山世鑑』では「阿摩美久」、蔡鐸本「世譜」では記載なし、蔡温本「世譜」・『球陽』は「一男一女」（「志仁禮久」、「阿摩彌姑」）となっている。『中山世鑑』に登場する一人の神、「阿摩美久」は、蔡温本「世譜」と『球陽』では男女一対の神、「一男一女」（「志仁禮久」、「阿摩彌姑」）と変化していた。表からみれば、「天孫氏」の誕生は国土創成の神と直接関係しないことがわかる。

最後に、最も重要なのは「天孫氏」は一体誰によって産み出されたのか。『中山世鑑』では「天帝ノ御子」である「一男一女」、蔡鐸本「世譜」では「一男一女」、蔡温本「世譜」・『球陽』では「天帝子」となっている。『中山世鑑』と蔡鐸本「世譜」は「一男一女」となっている。しかし、蔡鐸本「世譜」には「天帝ノ御子」がみられないため、完全に一致しているのは蔡温本「世譜」と『球陽』である。前述したように、「天帝子」の表現は「天帝ノ御子」の略記である可能性があるので、字面からみても「天帝の子」とであると連想しやすい。つまり、『中山世鑑』の「天帝ノ御子」と蔡温本「世譜」、『球陽』の「天帝子」は同義で、いずれも「天帝の子」という意味であると推測できよう。「天帝の子」が生ん

だ子は「天孫」と呼ばれるのも当然である。しかし、先にみてきたように、「天帝子」は一人であり、「天帝子」と「一男一女」は同一人物であるとも言い難い。「天孫氏」が生まれた結果からみれば、「天帝子」は「一男一女」に等しい存在であることだけをまず結論づけたい。

「天帝」という語は漢文的であるが、「天帝子」は漢文や日本の文献にはあまりみない。さらに「天帝子」という語は蔡温本「世譜」と『球陽』にしかみられない表現である。これらの文献は王府が編纂した漢文文献であるという性格からみて、「天帝子」はおそらく琉球の漢文文献のみに登場する独特な表現ではないかと考えられる。「天帝ノ御子」、「天帝子」、いずれにせよ初代国王「天孫氏」の誕生は「天帝」と関連していることは間違いない。神聖性や至高性が「天」の観念と結び付けられていることが重要であろう。

表に基づいて、各文献の開闢神話にみる登場人物や国土創成等の相関関係を見てきた。表をみて「大荒之際に化生」「国土創成の神」「天孫氏を生む」の項目において、『球陽』の記載と蔡温本「世譜」の記載は基本的に一致していることが一目瞭然である。つまり、『球陽』にみる開闢神話は蔡温本「世譜」を踏襲していることがいえる。

5 まとめ

『中山世鑑』、蔡鐸本『中山世譜』、蔡温本『中山世譜』、『球陽』に記述されている琉球の開闢神話について考察してきた。これらの開闢神話は「天」を含む語がたびたび登場し、開闢神話には「天」の観念が重要視されていることを明らかにした。

「天孫氏」の登場は4つの文献に共通している。すなわち、開闢神話を構成する他要素は文献ごとに変動が見られるが、「天孫氏」の要素はかわらないのである。例えば、「大荒」の際に化生した「一男一女」は、蔡鐸本「世譜」ではただ「一男一女」と記載しているが、蔡温本「世譜」と『球陽』では、この「一男一女」の名を「志仁禮久」、「阿摩彌姑」とであると加筆した。一方、最初に編纂された『中山世鑑』では、「大荒」の際に「一男一女」が化生したことについては一切記していない。また、国土創成についても、蔡鐸本「世譜」では全く記載なしであるが、『中山世鑑』では「阿摩美久」、蔡温本「世譜」と『球陽』

は「志仁禮久」、「阿摩彌姑」によって創成したと記している。

4つの文献に「天孫氏」の登場だけでなく、「天孫氏」が初代国王であることが一貫していることが明らかである。この「天孫氏」を生んだのは「天帝ノ御子」（『中山世鑑』）、あるいは「天帝子」（蔡温本「世譜」、『球陽』）であり、いずれも最高至上神「天帝」に繋がっている点がとても重要である。このように、これらの開闢神話には「天」を含む語が登場し、それにつながる「天」の観念の存在が明らかになった。

これまでの研究は、開闢神話にみる「天孫氏」をはじめ、「天城」、「天帝」等の表現は外来的であると述べ、あまり重要視してこなかったといえる。筆者は、これらの「天」を含む語があてられていることこそ重要であると考えている。つまり、漢文文献を熟読し、一定の漢文素養を持っている編纂者たちの観念のなかで「天」の観念があるからこそ、このような語があてられたのではないか。少なくとも、支配階層を代表する編纂者たちは、天帝や天神がいる「天城」、天上世界を統帥する最高権力者「天帝」を、地上界の城や王と対置して観念していることがいえよう。知識人の中で、一定の「天」の観念が受容されていたことを窺えるだろう。

また、これまでは、琉球の開闢神話や「天孫氏」が実在したかどうかについての議論がほとんどである。しかし、本稿は王府編纂の歴史文献に記載されている琉球の開闢神話、及び初代国王＝「天孫氏」に関する記述に反映されている「天」に関する観念という視点から考察を試みた。言い換えると、天孫氏の実在は是か否かという歴史的考察とはことなり、本稿は開闢神話を巡る記述のなかに、天孫氏が初代国王であるという観念を重視する。

琉球の開闢、島々の創建は「天帝」の命令で「天」から降りてきた「天神」によって行われた。さらに琉球の島々を創り上げたあと、初めて治世を行った人物とされる「天孫氏」は、「天帝」の後裔であるとされ、王家の起源を神聖至高な「天」に求めている。琉球の開闢神話と「天」との深い関係が見て取れるだろう。王権の正統性を強調するため、王の起源を説くため、「天」の思想が重要な役割を果たしていたことが明らかである。『中山世鑑』、蔡鐸本「世譜」、蔡温本「世譜」、『球陽』等の歴史書は、いずれも「天孫氏」が初代の国王とし、その出自と正統性を強調して記している。「天孫氏」が初代国王とすることが各文献に

共通しているのもその証拠であろう。特に、王家の系譜である『中山世鑑』や蔡鐸本、蔡温本『中山世譜』等にとっては、王統の神聖性や正統性の説明は極めて重要である。

※本稿は平成27年度沖縄県立芸術大学大学院芸術文化学研究科後期博士課程に提出した学位論文「琉球における『天』の観念の基礎研究」の一部を加筆修正したものである。

註

- (1) 「『三五曆記』に、天地がなご雞子（卵）のように混沌たるとき、その中に生まれ、1日に9変して長ざること1丈、天地もそれぞれ1丈ずつ伸びること1万8000歳にして天地が形成されたとする長人の説話」がある。また、「『述異記』には、盤古が死んで、その頭は四岳、目は日月、脂膏は江河、毛髪は草木となったとする死体化生説話が」ある。（『平凡社大百科事典』12 平凡社 1985年 p221）。
- (2) 呉海燕「琉球における漢文史書の研究—首里王府の史書編纂の特性と漢文文化の受容を中心に—」平成22年度沖縄県立芸術大学大学院 芸術文化学研究科後期博士論文（未刊） p36
- (3) 池宮正治「歴史と説話の間—語られる歴史—池宮正治著作選集3『琉球史文化論』島村幸一 編 笠間書院 2015年 p28
- (4) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』第5「中山世鑑」井上書房 1962年 p13
- (5) 糸数兼治「グスク試論—スクとシキ—」 pp.20～22 『南島文化』第36号 沖縄国際大学 南島文化研究所紀要 2014年
- (6) 仲松弥秀「グシク考」『沖縄文化』第5号 沖縄文化協会 1961年 p21
- (7) 前掲糸数兼治論文 p24
- (8) 外間守善・波照間永吉編著『定本 おもろさうし』 角川書店 2002年 p314
- (9) 外間守善校注『おもろさうし（上）』 岩波書店 2000年 p335
- (10) 前掲注3 p31
- (11) 中本正智／比嘉実／クリス・ドレイク「おもろ鑑賞—琉球古謡の世界—」連載・77回 月刊『言語』1991年2月号 言語編集部 大修館書店 前掲『東恩納寛惇全集1』 p8
- (12) 東恩納寛惇「琉球の歴史」『東恩納寛惇全集1』琉球新報社 編 第一書房 1978年 p6
- (13) 外間守善『沖縄文学の世界』角川書店 1979年 p91
- (14) 前掲 注3 p31
- (15) 前掲 注12 p8「天帝子」は天帝の誤りではないかと思われる。『中山世鑑』には「天帝子」という語が登場しないからである。「天帝子」は蔡温本『中山世譜』、『球陽』に登場する。
- (16) 前城直子『『中山世鑑』所伝・琉球開闢神話の史料批判的研究』『沖縄文化』第42号 沖縄文化協会 1974年 p4
- (17) 中村哲「琉球王国形成の思想—政治思想史の一齣として—」『沖縄文化研究1』法政大

学沖縄文化研究所 法政大学出版局 1974年 p 49

(18) 前掲前城直子論文 p 9

(19) 前掲呉海燕論文 p 81

(20) 前掲呉海燕論文 p 80

(21) 蔡鐸本『中山世譜』沖縄県教育委員会 1973年。読み下し文は筆者によるもの。

(22) 前掲呉海燕論文 p 147

(23) 前掲呉海燕論文 p 147

(24) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書四』井上書房 1962年 読み下し文は次に挙げる例④『球陽』を参照されたい。 p 20

(25) 前掲注(3) p31

(26) 球陽研究会編『沖縄文化史料集成 5 球陽 読み下し編』角川書店 1974年 p93